

作成番号:0218

=====

一般社団法人 日本侵襲医療安全推進啓発協議会 「会員向けメールマガジン」

=====

号数 : 2024-218

内容:子宮移植により妊娠・出産できる可能性は？

出典:Uterus Transplant in Women With Absolute Uterine-Factor Infertility.

JAMA. 2024 Aug 15; pii: e2411679.

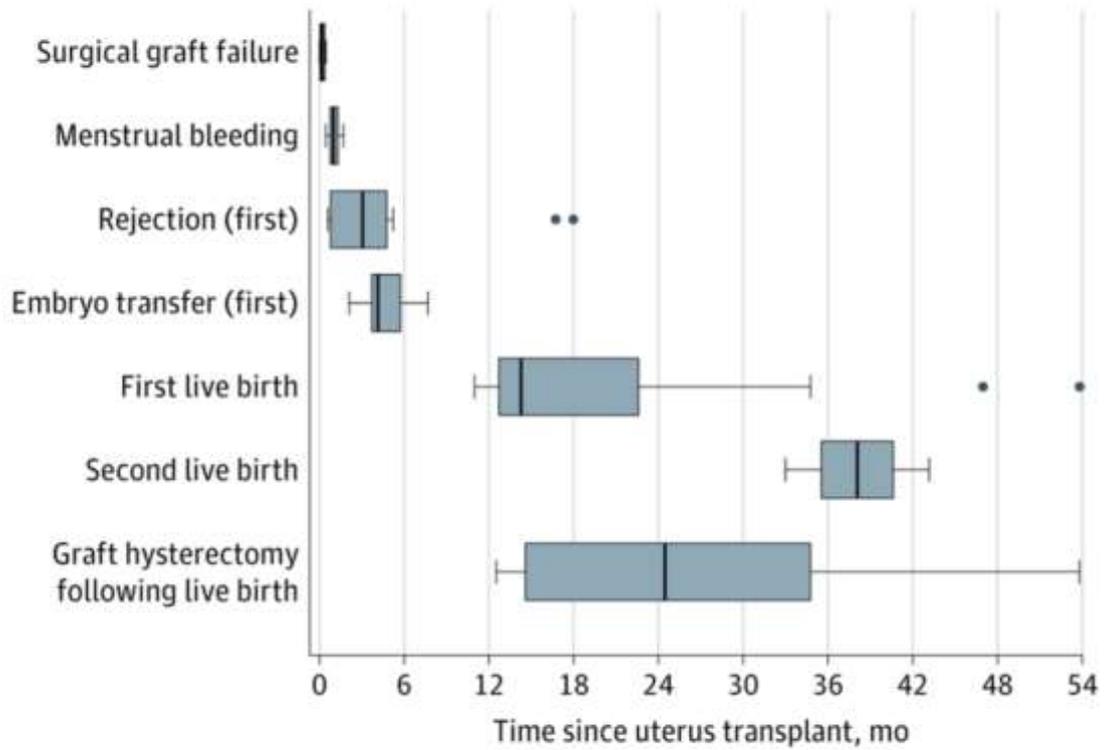
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/39145955/>

絶対的子宮性不妊症は 500 人に 1 人の割合で発生し、生殖医療における障壁となっている。子宮移植の成績、すなわち移植子宮生着後の生児出産率は高いのか、米国・ベイラー大学医療センターの研究者らが、「Dallas Uterus Transplant Study:DUETS 試験」の結果を、JAMA 誌オンライン版 2024 年 8 月 15 日号に報告した。

2016 年 9 月 14 日～2019 年 8 月 23 日に、絶対的子宮性不妊症で、卵巣は機能しており体外受精を受ける意思があり、医学的・心理学的基準を満たした 20～40 歳の女性に子宮移植を行った。ドナーは、25～65 歳で少なくとも 1 回の正期産の出産経験があり、医学的・心理学的合併症がないこととした。主要アウトカムは、子宮移植の有効性(少なくとも 1 回の生児出産を伴う移植子宮生着)、副次アウトカムは安全性とした。移植を希望した 701 例中、適格基準を満たした 20 例(年齢中央値 30 歳[範囲:20～36]、アジア人 2 例、黒人 1 例、白人 16 例)がレシピエントとして登録された。生体ドナー 18 例の年齢中央値は 37 歳(範囲:30～56)であった。20 例中 14 例(70%)で子宮移植が成功し、14 例全例が少なくとも 1 回、生児出産した。6 例(死亡ドナー 2 例中 1 例、生体ドナー 18 例中 5 例)は移植に失敗した。

子宮移植は技術的に可能であり、移植子宮生着後の生児出産率は高かった。

Figure 2. Timeline of Events After Uterus Transplant



The bars are medians with box ends representing first and third quartiles with whiskers extending to upper and lower boundaries and dots representing more extreme data.